◢ 史料・福岡ブントの文書①

共産主義者同盟九州地方委員会「安保闘争の敗北の確認の上に安保闘争の勝利的展望を切り拓け」、1960年5月28日

［注記
福岡ブントは、高揚する安保闘争のさなか、60年5月の時点で、ブント中央指導部の路線を明確に批判して、革命党の建設に集約されていくような運動の進め方を求めた。執筆は青山到。］

当面の情勢と展望

安保 闘争の敗北の確認の上に
安保 闘争 の勝利的展望を切り拓け
共産主義者同盟九州地方常任委員会

1年数ヶ月にわたって闘ってきた安保闘争は、5月19日深夜から20日未明の議会における岸政府自民党の会期延長・安保批准の強行採決によって、新しい局面に直面した。

このようなブルジョアジーの暴挙は労働者階級を中心として全人民の未だかつてない程激しい岸政府に対する憤激を生み出し、行動力をひき出している。

だがしかし、この全人民の憤激と行動力を有効に組織し、岸政府を打倒し、労働者階級の階級的団結を強める方針と展望の欠如は、今後の階級闘争において、労働者階級の側にとって極めて不利な状況をもたらすであろう。

20日→26日の大衆の異常な昂まりの中で自らの全くの無力を痛感したわれわれが、現在の情勢を的確に把握し、将来的展望を明らかにすることは、現在進めている党建の課題を具体的に我物となし成功的に進めるためにも極めて重要である。

このことによって安保闘争の勝利的展望を明らかにし、今後益々激化するであろうブルジョアジーの反動攻勢とスターリニスト、社民の裏切りの嵐の中で血みどろの戦いを通じて、革命的理論によって武装した革命党の建設を準備しなければならない。

一、情勢はブルジョアジーの勝利の過程として進行しつつある

Aブルジョアジーの動向

a 今回の今回のブルジョアジーの暴挙（直接には、岸政府と自民党の暴挙）は明らかにブルジョアジーの資本蓄積の急速な進行を背景としたブルジョアジーの自信のあらわれである。

このことを労働者階級の動向から捉えてみるならば、中枢的基幹産業（鉄、化学、電気、国鉄等々）における合理化反対闘争は個々の局面での部分的闘争はありながらも、全体として低調に終始し、基本的には合理化のレールに乗っていること、階級闘争の今後の展望にとって重要な意義をもつ三池闘争の全国的統一闘争としての展望の欠如等として表現される。

このような経済的情勢を裏付けとして、ブルジョアジーは大衆の憤激を冷然と尻目にみつつ、岸政府、自民党に、誰もが殆ど予想しなかった、単独国会審議の強行を行わせている。

このことは、ブルジョアジーが、現在の大衆の憤激と戦いを岸政府と自民党主流派へ引きつけつつ自らを闘争の背景から奥深く隠す隠れ蓑として岸と藤山を正面に押し出し、闘いの方向をそらそうとしていることの明白な表れである。

さらにこのことによって、大衆闘争の昂まりの度合いによっては、岸と藤山に傷をつけ、政府総辞職によって、事態を収拾し、国会解散を避けて、安保成立をかちとる戦術をも考慮に入れていることを物語るものである。

b 自民党反主流派の「叛乱」は資本家階級の安定的支配の確保のための布石にすぎない

反主流派はあたかも岸派に反対することによって民主主義派然たるポーズをとってきたが、今やその化けの皮ははがされた。彼らの「叛乱」は資本家階級の内部に於ける彼らの勝利的支配をどちらの道がよりスムーズに進められるかの相違にすぎない。

反主流派の一方の旗頭である石橋湛山は「国会解散は責任の回避であり岸政府の総辞職こそ事態収拾の正しい方法」とのべ、はっきりと衣の下から鎧の袖をのぞかせたし、また、三木・松村派は「正常な議会政治」を要求し、同類でしかないことを暴露した。「ブルジョア的代議制国家は資本家階級の共同の事務を処理する委員会」にすぎない。

このような資本家階級の政治的エリート内部の喧嘩が可能であるのは、明らかに現在の経済的基礎がブルジョア的であるからに外ならない。

ブルジョア的国家関係そのものの危険の前には、主流派も反主流派もともに一致して、ためらいもなくブルジョア的本性をあらわにして、プロレタリアートに向かって襲いかかるであろうことは疑うべくもない。

このような反主流派も統一戦線に巻き込めるかのような幻想をふりまくことは労働者階級の階級的意識を眠り込ませる階級的裏切りである。

c 民社党は資本家階級の番犬であり議会主義確保の蝶番にすぎない

国会審議を社会党とともにボイコットし、安保反対の態度をとっている社民党は本当に労働者階級の利益のために闘っているか。

否、政府と自民党の暴挙にたいし、無抵抗の「抵抗」しかなしえなかった社民党は、大衆の憤激の昂まりにオドロイて「岸も悪いが全学連の暴力も悪い」と直ちに「良識」のあるところを示した。彼らの良識は更にその本質を暴露し、岸首相との会見に於いて「院外の暴力に屈せず、議会政治のルールの維持」を説得しただけでなく、今更、オドロク程の馬鹿は同盟にはいないが、「安保を通し、その後に国会解散」を党首西尾の口を通じてあきらかにした。社民党は、それが徹頭徹尾ブルジョアイデオロギーとブルジョア的政策で武装されたブルジョア第二党であることを自己暴露した。

一瞬間でも西尾新党に期待をかけ、そのことを労働者階級と全人民に訴えたものは、恥知らずな裏切り者であり、階級闘争を指導する能力の欠如と堕落を証明したのだ。

d ブルジョア新聞は資本家階級の安定的支配のための武器にすぎない

各ブルジョア紙は、一斉に、岸政府と自民党の暴挙を非難攻撃した。

岸政府は「新聞のいう世論は本当の世論ではない」と応酬しブル新に挑戦した。

社会党中執委は、「岸政府の新聞侮辱」に抗議声明を発表した。このことから、恰も、ブルジョア新聞が「民主主義」の守護神であり、岸政府打倒の進軍ラッパを吹き鳴らしているかのように見える。

たしかに新聞は、反岸の世論を作り上げているように見える。しかし、イチジクの葉っぱの隙間からその恥部が表れている。朝日新聞は天声人語で全学連の暴挙をたしなめ、悪バを放った。26日の夕刊の　では岸を叩きつつ、しかし総評のゼネスト、組織的暴力で闘うのはよくないと訓えを垂れている。

彼らの恥部それは何か？　資本家階級がすでに戦犯岸を傷つけることによって、事態を自らのヘゲモニーのもとに収拾しようとしていることを背景として資本家階級を、安保改定によって帝国主義的自立と侵略体制の確立をはかっている元凶ブルジョアジーを、舞台の背景奥深くに隠し込み、岸に大衆的憤激と闘いの目標を固定化させ、最悪の事態においても岸と藤山にのみ詰め腹を切らせ大衆闘争の昂りを不発ないし暴発に終わらせる役割だ。

ブル新の岸批判は明らかに資本家階級内部の猿芝居にすぎないし、ブル新は資本家階級の有効な機関紙である。

社会党が、ブル新侮辱で岸に抗議声明を出したということは、猿芝居の舞台で踊ったという茶番劇の一幕にすぎない。だがしかし、このことは、ブルジョアジーとブル新の企図するところが、図当たったことを証明しているのだ。

現在の闘いの危機的様相が鋭く浮き彫りにされているのだ。

B　闘いはどのように進んでいるか

a　安保改定反対闘争は、資本家階級に肉薄しているか

戦後壊滅の危機に瀕した日本ブルジョアジーはアメリカ帝国主義者の直接の援助とスターリニスト、社会民主主義者の媒介的援助（アメリカ帝国主義軍隊の分遣隊占領軍を解放軍と規定し生産復興「闘争」、ブルジョア的生産関係に手をつけず生産するならば資本の蓄積は必然であるような「闘争」、更には、ブルジョアジーから目を蔽い、民族独立、平和のためブルジョア平和主義とブルジョア民族主義の汚辱に満ちた闘い、さらに又、改良主義的闘い、つまり階級抜きの「闘争」の枠の中に押し込めてきたことをさす）によって資本蓄積を有効（勿論、好況局面と不況局面の交代、さらには矛盾の内部深化を伴って）に進めてきた。

このような自らの力の回復と強化に自信を持つと同時に狭隘化した国内市場から国際市場へのり出し、海外市場争奪戦の中で、更に飛躍的な資本蓄積を望むブルジョアジーが、赤子の着物としての旧安保を脱ぎ捨て、帝国主義的自立と再編に見合った政治体制の強化をはかり、市場防衛のための自前の軍隊をももとうと指向して新しい着物を着ようとしているのが安保改定であること。

このことを我々は1年余にわたる安保闘争の中で一貫して暴露してきた。

しかし我々の力がまだ無力であるがゆえにスターリン主義者、社会民主主義者の主張する民族独立と平和のための闘争という裏切り的お伽噺から大衆を解放することは、殆どできなかった。そのため、敵の中心が日本ブルジョアジーであることを大衆的に明確にすることは今尚できていない。

更に19日以後の情況の下ではAで明らかにしたようにブルジョア民主主義すらも踏みにじった岸政府と自民党に対する怒りとしての大衆的憤激は、資本家階級の猿芝居とそれに乗せられたスターリニスト（自民党反主流までも巻き込んだ岸内閣打倒、国会解散要求）と社会民主主義者（ブル新擁護）の指導によって明らかに大衆の憤激と行動は直感的には感じつつも、暴挙の元凶である資本家階級からそらされ、岸に固定化されている。

敵の正体が蔽われ、敵の幻影に向かっての闘いが進められようとしている。プロレタリアートを中心とした全人民の異常な憤激と闘いの昂まりにもかかわらず、それはこのままの状態では資本家階級の猿芝居に手を叩く危険性につつまれている。

資本家階級の企図の成功は、もし、岸政府の打倒と解放をかちとったとしても、そのうちに完全にブルジョアジーの手によって事態の収拾を可能にするだろう。

闘いは、このままではブルジョアジーに肉薄しない。

b　大衆の憤激と行動力は有効に組織されているか

aで指摘した目標のあいまいさにもかかわらず、大衆の憤激と行動力は、昨年来の安保闘争の中で、敵を明確にし得ず、大衆のエネルギーを抑えに抑えてきた日和見主義的既存の指導部を突き上げ、重い腰を上げさせた。だが11．27の国会突入の大衆のエネルギーの前にその日和見性を暴露し、資本家階級に拝跪し、プロレタリア大衆を議会主義の枠の中に押しとどめようと躍起になり、本年度に入って重大（最終）段階に入った安保闘争において相も変わらぬスケジュール的カンパニア「闘争」の提起しか行わずプロレタリア大衆に、ブルジョアジーに頭を下げてお願いさせる焼香デモを押しつけることしか出来なかった彼等の盲導は依然として、裏切りを内包した指導と方針の提起しかできないでいる。

ブルジョアジーの暴挙のその日、5月20日の闘争は、スケジュール的に予定された統一行動に、大衆の憤激の自然発生的昂まりで、激しい闘いへと発展する様相をあらわにした。

だがしかし、このプロレタリアートと人民大衆の憤激を組織的に結集し、敵を明確にし、ブルジョアジーに肉薄する方向でブルジョアジーの政治委員会岸政府の打倒を中心スローガンとして直ちに反撃に転ずる方針は遂に提起されず相も変らぬスケジュール的カンパニア闘争としてしか提起されず、岸政府打倒、国会解散のスローガンを現実的なものとするような方針は提起されていない。

全学連、社青同、労働者の反撃への努力と奮戦にもかかわらず。

この期間闘いはどのように組織され、どのように闘われるべきであったか。

20日の闘争後直ちに反撃への闘争を準備少なくとも23日には26日規模の闘争を組織し、26日には4日規模の闘争を準備し、それを通じてゼネスト的闘いへと闘いを進め、岸政府打倒と国会解散をプロレタリアートと全人民の闘争によってかちとる方針が追求されなければならなかったのだ。

勿論、岸政府の打倒と国会解散がかちとられても、総選挙の中で、ブルジョアジーは蓄積した富のほんの一部の膨大な金をばらまき、更には、民社党を抱き込み（すでに抱き込んでいる）、彼等の政治的機関紙ブル新を有効に使い、○○〔○は判読不能〕の宣伝を圧倒的に振りまくことによってプロレタリアートと人民をダマし、脅迫し、また買収しつつ自民党の勝利（この中では、せいぜい反主流派の比重を増す程度）と民社党の拡大をかちとるための努力を必死で行い、そして彼らは、勝利を得るであろう。

しかし、プロレタリアートが自らの力で政府を打倒し、政治危機的状態をつくりだすことに成功するならば、プロレタリアートは自らの力に確信を強め階級的団結を強化するだろう。そのことは、その後（安保条約成立の）に荒狂うブルジョアジーの反対攻勢に団結を強化し、ブルジョアジーに有効な反撃を加え、自らの戦列を強化するだろう。

そして、将来、来るべき階級決戦への準備的闘争の中で、一たん客観的情勢がプロレタリアートに有利に展開するときは、自らの力を最大限に発揮し、プロレタリアート解放と人間の普遍的解放への闘いに勝利的に闘うため力を一歩でも強めることができるであろう。

闘いはそのような展望を可能にする方向で組織されているか。

(1) 労働運動の指導部総評民同はどうか

合理化闘争と賃金闘争とにおいて、階級的観点を貫くことができず改良主義的妥協によって、プロレタリアートの階級意識をマヒさせることに終止してきた総評民同指導部は、安保闘争においても、安保と合理化を分離し、前記の如きスケジュール闘争と敵の明確化を避けることによって、大衆の意識とエネルギーを改良主義の枠の中につなぎとめ有効な闘いを組織しえなかった。

このような総評指導部は、この期間の方針においても、革命的方針を提起し得る筈もなかった。

20日の大衆的憤激の昂りの最中にも、直ちに反撃を準備し得ず26日のスケジュール的闘争プランのみを提起した。

プロレタリアート大衆の憤激の昂りと抗議に押され、2, 3日して提起した6. 14のゼネスト的闘争の提案もまったく改良主義者の本性を暴露したものにすぎなかった。このような大衆の憤激の冷却期間(この間ブル新は徹底的に水をかけたであろうし、現在すでにその努力を行っている)を置いての方針は、岸政府を打倒し、プロレタリアートの階級的団結を強化するどころか事態の収拾を全くブルジョアジーの手に委ね現在進行しつつあるブルジョアジーの資本蓄積に相対応した労働者組織の全労化に手を貸すものでしかなかった。

26日の闘いに立ち上がったプロレタリアートは勿論このような、あまりにも露骨な裏切的方針を黙って見逃す筈はなかった。総評指導部は、闘いをもっと早めることなしには、自らの裏切りを覆い隠すことはできなかった。彼らは6・14の方針、ゼネスト的規模の闘いを6. 4においた。相も変わらずスケジュール的方針、しかも、その闘いの中から切開かれた展望とその後の方針は、全く不明である。大衆の憤激の昂りのなかで、20が終わって26、26が終わって6・4という山羊の糞式の方針提起は、闘争の一貫性を失わせ、大衆的エネルギーをその可能性の遥か以下に押える裏切的方針であることは明らかだ。

(2)総評民同指導部と同類の社会民主主義者であり、その指導的政党たる社会党はどうか

その同伴者であったブルジョア第二党たる西尾派に断乎たる絶縁状をつきつけ、みずから左翼社会民主主義としての浄化もなし得ず、西尾派からの絶縁状に泣く泣く手を切ることしかできなかった社会党は、この段階、安保闘争の最終段階においても依然として協調的態度と方針しか示していない。その激しい論調と勇ましいポーズにもかかわらず。

安保国会審議において、ブルジョアジーの指向の暴露に一定の役割を果たしつつも「国際緊張緩和にもかかわらず」とか「戦争の危機」という平和主義的観点からの追求のみを行い、ブルジョアジーの帝国主義的自立、搾取強化と侵略性を暴露しプロレタリアートに呼びかけ、ブルジョアジーの支配の打倒なしには、プロレタリアートの勝利はあり得ず、安保闘争を闘うなかでプロレタリアートの解放はプロレタリア自身の行為としてしかあり得ないということを自覚するように呼びかけることは行わず、議会外闘争をあくまで議会内闘争の補助的手段としてしか捉えていない。

そして、20日の暴挙の後「議会主義を踏みにじった自民党」としてしかとらえず、依然として大衆を議会主義的幻想から解放するなど夢にも彼らは考えていない。

その明白な表れは「国会解散のための議員総辞職」を匂わせブルジョアジーを索動するポーズをとりながら「今はその時期ではない」と一方では逃げ道を開いている。

彼らが本気で岸政府打倒を闘うつもりなら、直ちに議員総辞職を行い、プロレタリアート大衆に呼びかけ、その立ち上がりを促進し、その先頭に立って闘うべきだ。しかし、このようなことを社会民主主義者に期待することは夢物語にすぎないであろう。

(3) プロレタリアートの前衛党を僭称するスターリニズム共産党はどうか

彼らこそ、安保闘争を中心とする現在までの階級闘争の中で、一方で平和共存のプチブル的平和主義的幻想をふりまき、他方、安保は民族従属を深めるとブルジョア民族主義を説教し、大衆の目からブルジョアジーをひたかくしにかくし、プロレタリアートの階級意識を骨抜きにした元凶だ。彼らは11. 27には全く社会党、総評指導部とともに社会民主主義者同然に、プロレタリアートの昂揚の前に、なすことを知らないどころか、共産党の名に恥じることもなく、平然と議会主義の絆に大衆をつなぎとめることに躍起となったのだ。大衆のエネルギーに重しをおいてお願いの焼香デモを押しつけたのも彼らだ。このようなスターリニストに革命的方針を要求することは火のないところに煙を求めるようなものだ。

Aで明らかにしたブルジョアジーの政治的エリート内分派、自民党反主流派に期待をかけ、ブルジョア第二党民社党の抱込みという幻想を大衆にふりまいたのは彼らだ。

そして彼らは焼香デモの主張から掌を返したように20日以後はストライキを労働者に呼びかけた。しかし、一般的ストライキの呼びかけは、何ら闘う方針を提起したことにはならない。しかも益々敵を不明確にし、敵の中の分派に期待をかけることによって味方を混乱させながら。

(4)しかしそれでも大衆の憤激と闘いは昂まった

26日、前記既存指導部の裏切的方針にもかかわらず、労働者階級を中心とする全人民の闘いは異常な憤激、岸政府に対する怒りの渦巻く闘いであった(その規模の大小にかかわらず)。そして、プロレタリアートの闘いは6. 4には、もっともっと〇い昂りを示すだろう。

しかし指導部の一貫した日和見主義的指導はこのような激しい怒りにもえた労働者大衆の闘いを暴発に終わらせ、その後の沈滞を準備する可能性を生むだろう。そしてこのことは、今戦後15年間の労働運動の試金石として闘っている三池労働者の闘いにも大きな影響を与え、全体としての労働者階級の階級的意識と階級的団結を弱めこそすれ、強めることはないであろう。

c、警職法闘争の教訓はブルジョアジーのものとなったのか

5月28日、岸首相は記者団会見を行い、「総辞職は筋がちがう」「解散は今は考えない」と傲然とうそぶいている。

ブルジョアジーは自らの経済的力に自信をもち(日経連の前田専務は「戦後15年は労働者の時代、今から15年は資本家の世の中」と自信のほどを披瀝した)、一方では東西巨頭会談の決裂(ソ連の側からの)により緊張は緩和しないと、彼らの階級的本能から国際情勢を判断し、他方焼香デモという低姿勢の闘争に勇気を得て暴挙を行った。

彼らは警職法の教訓(もたもたしていたために国会が空白になり、全人民的闘争による追撃に、彼らのプランを一時的に変更せざるをえなかった)をわがものとし、強引に暴力をもって既成事実を作りあげ、プロレタリアートの指導部の裏切り性に期待して強引な居座りを続けている。そして前記の既成の指導部の裏切的指導と民社の援護射撃に満足のホホエミを浮かべているように見える。

プロレタリアートの憤激と闘いはそのホホエミを吹き飛ばし、彼らの顔色を蒼白ならしめうるか。プロレタリアートの自身のエネルギーが解き放たれるならば確かにそれは可能だ。

しかし指導部の指導は明らかに、そのエネルギーを議会主義と改良主義の枠の中に押し込めようとしているし、革命的指導部の無存在は、そのことを不可能にするだろう。

現在予測できる限りでは6．4の闘いは、まさにゼネスト的闘争としてしか闘われず、特に基幹産業労働者の立ち上がりが弱いと考えられる。

更に、政府とブルジョアジーは、アイク訪問と絡んで警備体制を強化し、弾圧にのりだして来るであろう。

プロレタリアートの側からの警職法の教訓(追撃戦が緩慢であったが故に岸政府を打倒することができず、警職法をふきとばしブルジョアジーのプログラムを、一時的とはいえ変更を余儀なくさせたにも係わらずその後の闘いの沈滞をさけえなかった)は全く生かされていない。

情勢は明らかにブルジョアジーの勝利の過程として進んでいる。

現在のままでは、岸がいうように彼らが総辞職もしないし、解散もしない状態で19日以後迄持ちこたえる可能性を予想させる情況である。

情勢はブルジョアジーのヘゲモニーのもとに収拾される可能性が大きい。

そしてプロレタリアートは階級的意識と階級的団結を強めないどころか、武装解除の状態で次の反動攻勢の嵐にさらされるだろう。勿論プロレタリアートが反撃なしにすますことはありえないが。

虚偽の勝利的展望はプロレタリアートに闘争終了後(闘ってる間は有効性を発揮するように見えても)虚無感を与え、その虚脱状態を生み出し、階級意識をマヒさせる丈だ。

二、安保反対闘争の中で、階級的意識を高め階級的団結の強化を

前記の如き基本的動向は、明らかに革命的前衛党の欠如を明確に物語っている。

A、このような状態の中で、正しくもスターリニズムからの組織分離をかちとった我が同盟はその力がまだ不十分であるとしても、その力の限りで革命的に闘ってきたか

我が同盟中央の方針と指導を総括するならば、残念ながら、完全に否定的に答えざるをえない。

昨年10月迄の方針は、一般的抽象的ゼネストの提起(安保改定の本質的暴露と把握の正しさがあるにも係わらず)に終始し、基本的には全学連の英雄的闘争をテコとして労働者階級に呼びかけることのみしかなしえず、11．27において、プロレタリア大衆の爆発的エネルギーの偉大さに目を奪われゼネスト呼号の空発という現実的条件(このことはブルジョアジーの資本蓄積の進展と対応しているのだ)を全く無視して、国会、羽田とブルジョアジーの土俵の上での闘争にのみ終始し、革命的暴露(ブルジョアジーの攻撃の本質的バクロと社会民主主義者、スターリニスト本質とその指導の誤りのバクロ)を放棄して、極左戦術の対置しかなしえなかった。

そのためプロレタリアートのエネルギーを汲みだすどころか改良主義の枠の中に固定化してしまった。全学連の何回かの英雄的闘争によって、プロレタリアートをひきつけ、彼らを立ち上がらせると考えることは、先進的労働者に対する侮辱以外の何ものでもない。

資本とスターリニズム、社会民主主義者の重い鎖にガンジガラメにしばりつけられている彼らは、そんな事で闘いに立ち上がることができるなら、とっくの昔にゼネストに立ち上がっていたに違いない。

このような指導と方針は、その主観的革命性にも係わらず、二重にも三重にも犯罪的であったといわなければならない。

このことによって、真の革命家として自らを鍛え上げる努力は放棄され、戦術極左の活動家集団に同盟を固定化し、そしてブランキズムを戦術極左であることがむしろ誇らかに語られさえしたのだ。

第二に、資本とスターリニズム、社会民主主義の軛を脱し同盟へ近づいた労働者(僅か数百の、全労働者階級から見れば、大海の一滴にも当たらない)を全学連の激しい闘争に参加させ、厖大な労働者階級(これが今どのようにスターリニズムと社会民主主義の汚物にまみれていようとも、彼らこそ、いや彼らのみしか自らの解放を、人間の普遍的解放の力を持っていないのだ)から切り離し、今尚改良主義の枠の中にいる彼らと共に闘う中で、革命的方向を与える任務を放棄させ、しかも、敵の集中砲火の標的たらしめているのだ。

第三には、あのすばらしい学生大衆(何百という革命的インテリゲンチャを生み出す可能性はこの中にあるのだ)の若々しい情勢と行動力を、展望のない極左的闘争の中で暴発させることしかなしえず、将来的革命のために有効に組織する指導は全く放棄されたのだ。

そしてこれらのことは「政治は予想外のことを生み出す」という革命的共産主義とは縁もゆかりもない、賭の「理論」で指導されたのだ。「戦旗」第15号の政治局書記局の印刷所拡大カンパの訴えの中で「……我が同盟の全力量が発揮されてこそその展望は意外に直ちに開けるであろう。」と書いている。「適当な瞬間に革命的奇襲を試みるよく組織された一小グループが最初の二、三回の成功によって、国民的大衆の心を引きつけそれによって成功的な革命を遂行しうると信じている人」というエンゲルスのブランキーに対する批判は全く我が同盟中央批判としても何ら変更の必要もない的確な批判である。

これらのことは、ブルジョアジーの反動攻勢に虚無感と不安感を抱いて焦燥感に捉われ、激しい闘いで、自らを自慰すること支えんとするプチブル急進性以外の何ものでもないのだ。

羽田闘争に対するいわゆる進歩的文化人の支持を考えるとき、それは革命的理論と革命的情熱での結びつきではなく、裏返しの虚無感の表れにすぎないことは明白だ。

労働者大衆の一定の支持も彼らの現在の状態に対する不安感に基くブルジョアジーに対する憎しみに支えられたものだ。その支持は基本的に中小企業労働者に限定されていた。

そのようなものはブルジョアジーの反動攻勢の嵐の前には一たまりもなく幻想的力にしかすぎない。このような虚偽の対象化に安堵を抱くことは、その主観的革命性にも係わらず、血みどろの格闘によって革命的マルクス主義を獲得することをサボり、長期且、困難な革命的実践を恐れるプチブル性の現象形態なのだ。

このことは、更に、その根底的理論を自らの力で血肉化することをせず、『探求』からヒョーセツしたように、レーニン・トロツキーの出来上がった結論の中から都合の良い部分を引き出し、機械的に適用しえなかったことにも表れる。『共産主義』7号の島書記長(！)の論文を見よ。

スターリニズムからの分離はしかし簡単なものではない。階級闘争に於いて、濡れ手に粟的事態を期待することは、その指導の能力の欠如を証明する以外の何物でもない。

このことは、全学連が4・26闘争後、ヌエ的自己批判を行い、後退することによってのみ、厖大な労働大衆を組織している青学共闘会議、国民共闘会議からの除名を免れるという無様さを結果した。

このような同盟中央の無理論と無自覚性は、現段階では、益々極端な犯罪的役割を遂行している。

わが同盟が正しくもスターリニズム共産党から組織的分離を行い真の革命的前衛の建設を指向しているが故にこそ、その原則的誤りは、その犯罪性を益々大きいとするのだ。

『戦旗』第15号のスローガンは「岸を打倒せよ！！」である。冗談ではない。我々は岸個人を打倒するのではない。明らかにブルジョアジーの政治委員会としての岸政府を打倒しなければならない。そんなことはわかりきっているか。それならばそのように表現すべきだ。大衆の憤激が岸へと向かっているからか。それならば前衛党は、大衆の限定された認識を普遍的なものへ発展させなければならない。そうしないならば、大衆の憤激を階級的憤激へ、闘いを階級的闘いへと高めることはできないのだ。日本は韓国とは違うのだ。

そして又、同『戦旗』の見出しは「連日スト・デモで新安保をぶっつぶせ」となっている。一で明らかにしたように、新安保をつぶすことは、現段階では不可能だ。新安保をつぶすことができるのは、日本プロレタリア革命の勝利によってしかありえないのだ。何故なら、新安保は日本ブルジョアジーにとって、単なる政策、単なる法案ではない。それは、日本資本主義そのものの現在的発展段階の政治的表現だからだ。それは現在的には、日本資本主義そのものなのだ。

だが心配はいらない。同盟中央は、革命まで考えている。同号主張には、「5・26を頂点とする波状的なストとデモを以ってブルジョアジーを脅かし、物情騒然たる情況をかもし出すならば、政府的危機は拡大し、岸は倒れ、革命的情勢を作り出すことができるだろう」と。だがしかし、同じく一で明らかにしたようなブルジョア的発展の現段階ではそのようなことはありえないのだ。

フランスの1848年革命の革命的総括、『フランスに於ける階級闘争』でマルクスは書いた。「このように一般的に好況が支配している時期、すなわちブルジョア的生産力がブルジョア的生産形態の中で可能な限り発展している時期には、本当の革命は問題にならない。今、大陸の秩序党はお互いに分裂騒ぎを演じているが、これは反動派の意識しないことであるが、その基礎がブルジョア的だからだ。反動派のブルジョア的発展を後ろへ引き戻そうとするいかなる反動的試みも全て粉砕されると同時に、民主主義者の道義的憤慨も熱狂的宣言もことごとくはね返される。革命は恐慌とともにしかおこらない。だが恐慌が必ず来るのと同様に革命は確実に起こる」と。

どのように同盟中央は藪にらみをしたのかしらないが、冗談もホドホドにしてもらおう。

自らの主観主義によって情勢を判断し、革命を予告し、出来ないことをプロレタリアートに出来るような幻想を与えることは、革命的共産主義とは全く無縁のことだ。

そのような幻想を与えることは、プロレタリアートの階級性をマヒさせ、ブルジョアジーに手を貸す以外何の利益もないことだ。

このまま、エセ共産主義的宣伝が続けられるならば、同盟の公的政治生命は、安保闘争と共に死滅するだろう。

B、安保闘争の中でプロレタリアートの階級的団結を強化せよ

それでは現在の情勢の中での革命的方針は何か、コマ切れのスケジュール闘争という裏切的方針しか提起していない既存の指導部の指導に対し、われわれはどのような方針をもって闘いに臨むのか。われわれの力を考えてみれば、どんなに切歯扼腕しようとも、現在われわれはプロレタリアートを指導し自らの力で革命的闘争へ向かわせる力を全く持っていない。

しかし、日本プロレタリア革命（プロ独裁の樹立）と世界革命の勝利的達成をその基本的使命とする我々は、安保闘争の重要な段階に於いて、革命的方針を提起し、プロレタリア大衆の中に革命的意識をもち込み、その階級的団結を可能な限り強化することだ。

コマ切れ的闘争ではあっても、この闘いを進める中でプロレタリアートに向かって徹底的に階級的バクロを行い、憤激を組織化しそのことによって不連続的裏切りの方針を止揚し、プロレタリアートの闘いを連続的な昂揚へと向かわせ、岸政府を打倒し、国会解散をかちとるような闘いへと押し進めるよう徹底的に闘うことだ。

現在の情勢を明確に大衆に知らせ、即ち、安保闘争の敗北の確認の上にたって、ブルジョアジーの本質およびブルジョアジーの動向、その意図を徹底的にバクロし、プロレタリアートの中に火のようなブルジョアジーに対する憎しみを植えつけ、この闘いのなかでプロレタリアートの階級的団結を強化すること、このことこそがその後のブルジョアジーの反動攻勢とスターリニスト、社会民主主義者の裏切の嵐の中で、敵が何であり、悪しき同伴者が誰であり、真の革命的指導部がどこにあるかを見極める素地を作るであろう。これこそが安保闘争の勝利的展望を切り拓く唯一の革命的方針だ。

「プロレタリアートは時々勝利を得るが、それはほんの一時にすぎない。プロレタリアートの勝利はその直接の成果にあるのではなくて、その益々強まる団結」にあるのだ。

ブルジョアジーの支配の打倒とプロレタリアートによる政治権力の奪取、これなしにはプロレタリアートと被搾取大衆の解放、人間の普遍的解放はあり得ないことを執拗に粘り強く訴えかけ、プロレタリアートを階級へと形成して行くこと、このことによってのみ、プロレタリアートは、反動攻勢に有効に闘い、自らの生活と権利を守りつつ、将来的革命的展望を切拓き進むであろう。

学生戦線においても基本的には同じである。岸政府打倒の闘争のなかで学生戦線を強化し、今後来る反動攻勢に有効に反撃し、学問の自由と学園の自治を守り抜く態勢を固めよ、これが学生戦線において大衆的に与えられる唯一の革命的スローガンであり、革命的方針である。

このような努力にも拘らず、我々の努力はその無力さの故に大勢を決することは出来ないであろう（特殊的に学生戦線では別だが）。

だが何ら悲観することはない。

我々の倦まずたゆまない粘り強い努力は、プロレタリアートにその歴史的使命を自覚させ、危機の時期には必ずや彼らをして自らの力で自らの解放を闘いとらせることができるであろう。

「あれまたはこれのプロレタリアがあるいは全プロレタリアートがさし当って何を目的としているかが問題ではない。彼らが何であり、彼らがその地位からして歴史的に見て何をなすように余儀なくされているかが問題である」（聖家族）。

我々の決定的に重要な課題がプロレタリアートの本質力を確信し、このような闘争を進めつつ、革命的理論によって武装された革命的前衛党を構築することにあることは勿論明らかであろう。これこそが階級的団結強化の決定的指標なのだ。

三、革命的共産主義党を構築せよ

現在の情勢が一目瞭然と示すことは、現在の一切のプロレタリアートの悲劇が、革命的前衛党の欠如にあることである。

我が同盟九州地方常任委員会は、これまで同盟中央に多くの疑問と批判をもちながら、その理論的無力の故に、その前提の上でしか闘ってこなかったこと、このことをさきより進めつつある総括を深化する中で自己批判し、九州同盟の革命的再生を闘いとり、一刻も早く、同盟の全体的革命的再生を闘いとらなければならない。そのことを通じて、現存の四分五裂している革命的左翼の可能な限りの多数の統一と結集により真の前衛、革命的共産主義的政党を創立しなければならない。それなしには、どんな客観的条件の成熟もプロレタリアートの勝利を保障しない。

このことが、現在進行しつつある安保反対の最終段階から我々の引き出した最大の教訓でなければならない。

だがこのことは言うは易しいが、現実化するためには全同盟員諸君の血のにじむような理論創造とその物質化のための革命的実践なしにはあり得ないのだ。

常任委員会は、同志諸君と共に、その先頭に立ってそのための努力に全力をつくすだろう。

(附)同盟の革命的再生の展望と方針を可能な限り展開するつもりであったが、長くなったので、今後さらに明らかにして行きたい。　常任委員会